

# 文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究<sup>(※01)</sup>

**研究組織** 江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、吉田暁子、小林達朗、小野真由美、城野誠治、阿部朋絵、田村彩子（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子、永崎研宣（以上、客員研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）

**目的** 国内外の諸機関との連携を見据え、当研究所の文化財に関する調査研究の成果・データをより国際的標準に見合うかたちを整え、効果的に共有してゆくための研究を行う。あわせて地方公共団体と文化財に関する情報の提供と共有を行うことを視野に入れる。

## 成果

### 1. 調査研究の成果の公開と、研究情報の国際発信

- 当研究所刊行の論文等を国立情報学研究所が運営する学術機関リポジトリデータベース（IRDB）を通じて公開する作業を進め、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『保存科学』、各種報告書など148件を今年度新たに追加し、合計14タイトル3,836件の論文・刊行物のフルテキストを掲載・公開した。
- 展覧会カタログ所載記事・論文のデータを「東京文化財研究所美術文献目録」として、世界最大の共同書誌目録データベースであるOCLCのセントラル・インデックスに情報提供し、今年度は2018（平成30）年の文献情報5,712件を追加した。
- 新型コロナウイルス感染症拡大防止を目的として、中止・延期・臨時休館等の影響を受けた、日本の美術館・博物館の展覧会情報を収集したデータベース（1408件）を作成、公開した。

[https://www.tobunken.go.jp/materials/exhibition\\_covid19](https://www.tobunken.go.jp/materials/exhibition_covid19)

### 2. 国内外の関連機関との共同研究・協議

- 京都府所蔵昭和初期文化財調書の約20,000点のデジタル画像のうち約14,300件のメタデータを追加したほか、調査撮影フィルムのデジタル化を進め、データベース構築を行い、公開活用のための協議を行った。
- Getty研究所のGetty・リサーチ・ポータルに当研究所所蔵の所蔵資料を公開するための協議を行い、共同研究の成果について北米美術図書館協会（ARLIS/NA）での発表を英語で行った。
- イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と日本美術及び同研究に関する英語文献・記事情報の採録に関する運用面での協議をオンラインで行った。

## 発表

- Anne Rana, Emura Tomoko, Building Bridges: Working Together to Disseminate Japanese Art Literature（研究の架橋：日本美術資料の情報発信についての国際協働）49th Annual Conference of Art Libraries Society of North America（北米美術図書館協会第49回年次大会） 21.5.13



セインズベリー日本藝術研究所とのオンライン協議



オンライン開催の北米美術図書館協会（ARLIS/NA）での発表

# 日本東洋美術史の資料学的研究<sup>(シ02)</sup>

**研究組織** 小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、城野誠治、小林公治、江村知子、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、吉田暁子(以上、文化財情報資料部)、早川泰弘(副所長)、津田徹英(客員研究員)ほか

**目的** 近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究及び光学調査を進め、研究の基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。

## 成果

### 1. 研究基盤となる資料整備

美術史研究のためのコンテンツ(日本美術史年記資料集成)作成として、平成11(1999)年以降の展覧会図録から年記のある作品の資料を順次収集して入力した。入力された資料は569件に達した。

### 2. 研究交流の推進

日本の美術工芸に関する研究会を4回行った(2021(令和3)年4月27日、5月25日、7月16日、2022(令和4)年1月25日)。所外の研究者による発表は以下の通り(所内の研究者による発表については、下記発表の項を参照)。

- 梅沢恵(神奈川県立金沢文庫)「辟邪絵」の主題についての復元的考察」令和3年度第1回文化財情報資料部研究会 21.4.27
- 山本聡美(早稲田大学文学学術院)「中世六道絵における阿修羅図像の成立」令和3年度第7回文化財情報資料部研究会 22.1.25
- 阿部美香(名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター)「六道積から読み解く聖衆来迎寺本六道絵」令和3年度第7回文化財情報資料部研究会 22.1.25

また平安～鎌倉期にかけての仏画に関する調査研究の成果をオープンレクチャーで発表した。

### 3. 報告書の刊行

令和2年度に刊行した報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究—ワット・ラーチャプラディットの漆扉—』の英語版を刊行した。

## 論文

- 安永拓世：「与謝蕪村筆『十宜図』(川端康成記念会蔵)の史的位置」『美術研究』434 pp.35-62 21.8

## 発表

- 江村知子：「新出の住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」(ライプツィヒ民族学博物館蔵)について」令和3年度第2回文化財情報資料部研究会 21.5.25
- 小林達朗：「皆金色阿弥陀絵像の出現とその意味—転換期の時代思潮の表象」第55回オープンレクチャー 21.11.5
- 米沢玲：「カナダ・モントリオール美術館所蔵の熊野曼荼羅図について」令和3年度第7回文化財情報資料部研究会 22.1.25

## 刊行物

- 『Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit—Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand—』 22.3

## 近・現代美術に関する調査研究と資料集成 <sup>(シ03)</sup>

**研究組織** 塩谷純、橘川英規、吉田暁子、城野誠治、黒崎夏央(以上、文化財情報資料部)、三上豊、丸川雄三、田中淳、齋藤達也(以上、客員研究員)

**目的** 日本の近・現代美術を対象として、東京文化財研究所蔵の資料をはじめ他機関や個人が所蔵する作品及び資料の調査研究を行い、これに基づき研究交流を推進する。併せて、これまで蓄積してきた美術関係者情報の整備・発信に努め、また主に現代美術に関する資料の効率的な収集と公開体制の構築を目指す。

### 成果

- 黒田記念館に収蔵される黒田清輝油彩画作品149点の撮影(カラー写真、近赤外写真、蛍光写真)を行った。
- 既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語部分の和訳を完了しウェブ上で公開、また黒田清輝・久米桂一郎間で交わされた書簡のうち12通の翻刻・解題を『美術研究』434・435号に研究資料として掲載した。
- 戦後の日本美術教育に大きな影響を及ぼした創造美育協会に関する研究会を開催、本部事務局長を務めた島崎清海の資料について中村茉貴氏による発表と討議を行った(9月24日)。
- 岸田劉生の静物画について、部内研究会で口頭発表した(2月24日)。
- 2018年に寄贈を受けた美術評論家三木多聞資料のうち、1960年代の展覧会資料を貼付したスクラップブックを整理・デジタル化し、当研究所ウェブサイトで公開した。
- 黒川公二氏(佐倉市立美術館)の協力を得て調査を実施している美術評論家鷹見明彦の資料のうち、1980年代後半から鷹見が没する2011年までの間に画廊で撮影された展覧会会場写真を納めたアルバムを整理し、そのリストを当研究所ウェブサイトで公開した。

### 論文

- 塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也：「書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(二)」『美術研究』434 pp.71-105 21.8
- 塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也：「書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(三)」『美術研究』435 pp.73-97 21.12

### 発表

- 吉田暁子：「岸田劉生による「手」という図像 静物画を中心に」令和3年度第8回文化財情報資料部研究会 22.2.24



黒田清輝油彩画作品の撮影

# 美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開<sup>(シ04)</sup>

**研究組織** 小林公治、小林達朗、二神葉子、塩谷純、江村知子、小野真由美、米沢玲、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、吉田暁子、黒崎夏央、大谷優紀(以上、文化財情報資料部)、早川泰弘(副所長)、倉島玲央(保存科学研究センター)

**目的** 絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

## 成果

- 螺鈿及び漆器類ほかに関わる調査研究、研究協議等
  - 2021(令和3)年5月13日、6月16日に都内個人蔵螺鈿漆器類について調査を実施した。7月30日にMIHO MUSEUMにて春日社に伝わる螺鈿漆器に関する聞き取り調査を行い、31日に京都角屋もてなしの文化美術館にて同館所蔵螺鈿の調査を実施した。11月1日に東京国立博物館にて中国・朝鮮螺鈿漆器の調査を東博研究員の立会いで行った。11月11日、12月3日、2022(令和4)年2月28日には同館にて南蛮漆器ほかのCTスキャン調査に参加した。1月25日に慶應義塾大学ミュージアム所蔵品調査を行った。また2月21日に東京大学総合図書館所蔵品の調査を実施したうえで3月15日に同館所蔵救世主像聖龕の塗膜調査について保存科学研究センターと研究協議を実施した。
  - 個人蔵の伝平等院須弥壇剥落螺鈿貝片を借用し、2021(令和3)年9月6日、保存科学研究センター及び外部研究者と研究協議及び調査を開始したほか、併せて個人蔵の長崎螺鈿(青貝細工)箱についても同様の体制で調査を進めた。
- 研究成果公開
  - 2021(令和3)年7月16日に開催した第4回文化財情報資料部研究会にて発表を行った。
  - 2021(令和3)年9月18・19日にオンライン開催された日本文化財科学会第38回大会にてポスター発表した。
  - 2022(令和4)年2月13日に九州大学が主催したオンライン国際シンポジウムにおいて口頭発表した。
- 研究データの整備と公開
 

『美術研究』のバックナンバーについてよりの確な文献検索と発見向上への便宜を提供するため、検索用キーワードの抽出作業を実施した。また中国関連文献について中国語インデックスの作成も進めた。このインデックスについては今後検索ページを整備のうえ公開していく計画である。



東京国立博物館での調査風景(2021年11月1日)

## 発表

- 小林公治：「近現代日本における「南蛮漆器」の出現と変容ーその言説をめぐってー」第4回文化財情報資料部研究会 21.7.16
- 倉島玲央、早川典子、小林公治：「多変角測色計による貝類切片の分光分析」日本文化財科学会第38回大会(ポスター受賞) 21.9.18-19
- 小林公治：「秋草と螺鈿ー岬町理智院蔵秀吉像厨子から見る輸出品物としての南蛮漆器ー」九州大学主催国際シンポジウム「越境する文化：モノ、ひと、思想の軌跡と交流」 22.2.13



# 無形文化財の保存・継承に関する調査研究 (△01)

**研究組織** 前原恵美、久保田裕道、石村智、鎌田紗弓、佐野真規(以上、無形文化遺産部)、早川典子(保存科学研究センター)、飯島満(特任研究員)

**目的** 我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

## 成果

### 1. 無形文化財に関する調査研究

ア) 芸能分野：古典芸能(歌舞伎・文楽・三味線音楽ほか)に関する調査研究・芸能にかかる文化財保存技術、道具・原材料の調査研究

イ) 工芸分野：伊勢型紙の製作技術に関する研究

### 2. 現状記録を要する無形文化遺産の記録作成

ア) 諸芸：講談及び落語(正本芝居噺)の実演記録を作成(新型コロナウイルス感染症拡大により延期)

イ) 平家：復元曲の実演記録を作成(菊中央司氏ほかによる復元曲1曲)

ウ) 宮園節：伝承曲の実演記録を作成(宮園千碌氏ほかによる古典曲・新曲各1曲)

### 3. 研究調査に基づく成果の公表

ア) 第15回公開学術講座「樹木利用の文化－桜をつかう、桜で奏でる－」(東京文化財研究所ほかでリモート収録、3月30日ウェブ公開)

イ) 無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルス－Good Practiceとは何か－」(東京文化財研究所、2021(令和3)年12月3日)。

## 論文

- 前原恵美「常磐津節《将門》の音楽分析－〈オトシ〉と〈ナガシ〉の機能をめぐって－」『桐朋学園大学研究紀要』2020年第47集 pp.1-17 21.10
- 鎌田紗弓「明治前期東京の歌舞伎囃子方：劇場出勤動向および共演関係の解明に向けて」『無形文化遺産研究報告』16 pp.41-85 22.3

## 報告

- 前原恵美ほか「楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告5」『無形文化遺産研究報告』16 pp.29-40 22.3
- 『無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルス－Good Practiceとは何か－」報告書』 22.3
- 『第14回公開学術講座「竹と日本の伝統的な管楽器」報告書』 22.3



フォーラム3の様子



「第15回公開学術講座」収録の様子

## 発表

- Megumi Maehara: A diversity – focused approach to musical instruments, Conference on the Exploring and Safeguarding Shared ICH in East Asia 21.9.10 (オンライン開催)
- 前原恵美ほか(鼎談)「コロナ禍における研究機関の取り組み」第29回楽劇学会大会 21.7.11 (オンライン開催)

## 刊行物

- 『及川尊雄旧蔵 紙媒体資料目録』 22.3
- パンフレット「日本の芸能を支える技」Ⅷ 能装束 22.3

# 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 <sup>(△02)</sup>

**研究組織** 久保田裕道、石村智、今石みぎわ(以上、無形文化遺産部)、後藤知美(無形文化遺産部併任、文化財防災センター)

**目的** 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで収集・保管してきた無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行う。また選定保存技術については、国により選定された技術及び未選定の技術について情報を収集し、その中で重要なものについては現地調査・記録作成を行う。

## 成果

1. 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため実地調査を控え、感染症が無形民俗文化財に与える影響について情報を収集するとともに、継続的な調査も行った。継続的研究として風俗慣習分野では正月儀礼等について、民俗芸能分野ではシシ系芸能や武術を伴う芸能等について、民俗技術分野として箕の製作技術等について、伝承や保護の実態についての情報収集を行っている。
2. 無形文化遺産の防災に関する調査研究として、東日本大震災被災地である宮城県女川町、福島県浪江町苧宿地区の調査を継続。また無形文化遺産総合データベースの改修を進め、あわせて映像アーカイブスとライブラリーの構築を行った。
3. 第16回無形民俗文化財研究協議会を「映像記録の危機を乗り越えるためにー」をテーマに12月17日に開催し、6件の事例報告及び登壇者による総合討議を行った。その模様は映像配信を行い(令和4年1月15日～2月15日公開)、成果は『第16回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。
4. 選定保存技術については、金属煮色着色の技術に関する映像記録の編集作業を実施(令和2年度国宝重要文化財等保存・活用事業「金属煮色着色文化財保存技術伝承事業」における記録を行った。

## 論文

- 久保田裕道「無形文化遺産としての『生活文化』」『無形文化遺産研究報告』16 pp.87-101 22.3

## 報告

- 久保田裕道「無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について」『第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム pp.13-18、27-35 22.3

## 発表

- 久保田裕道「Diversity in intangible cultural heritage as seen through lion dances」Unesco Mongolian National Commission /ICHCAP オンライン 21.9.10
- 今石みぎわ「映像による記録作成とアーカイブ化にかかわる実践的課題」国立歴史民俗博物館共同研究「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究ー制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」第1回研究会 オンライン 21.6.12
- 後藤知美「地域社会に残された水害の記憶ー水害常襲地・埼玉県の実例からー」東京文化財研究所令和3年度第5回総合研究会 東京文化財研究所 22.2.1

## 刊行物

- 東京文化財研究所編『第16回無形民俗文化財研究協議会報告書』22.3



感染症対策をして開催された南信州獅子舞フェスティバル(長野県飯田市)

# 無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集 (△05)

**研究組織** 石村智、金昭賢(以上、無形文化遺産部)、二神葉子(文化財情報資料部)、宮田繁幸、松山直子、神野知恵(以上、客員研究員)

**目的** 無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

## 成果

1. 韓国文化財庁国立無形遺産院との研究交流では、本研究所の研究員の派遣と相手機関研究員の受け入れを予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大(以下、「コロナ禍」)のため中止せざるを得なかった。代わりに両国のコロナ禍における無形文化遺産保護の現状について情報交換を行った。
2. 無形文化遺産の国際的な動向に関する調査研究では、コロナ禍のためオンラインでの開催となったユネスコ無形文化遺産条約第16回政府間委員会(パリ:12月13日～18日)に2名のスタッフ(石村・二神)がリアルタイムで傍聴し、情報収集を行った。なお、本調査の成果は『無形文化遺産研究報告』第16号において報告した。
3. アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)への協力では、研究者フォーラム「無形文化遺産研究の進展と課題ー持続可能な未来に向けてー」(10月29日)、国際シンポジウム「無形文化遺産の貢献ーより良い学びと持続可能なまちづくりにに向けてー」(12月21日～22日)、に1名のスタッフ(石村)がリソースパーソンとして出席した。
4. ユネスコ・イコモス共催国際会議『Culture, Heritage and Climate Change (ICSM CHC)』に1名のスタッフ(石村)が専門家として参加し、気候変動と文化遺産保護の問題について各国の専門家と議論を行うとともに、ポスター発表を行った。
5. コロナ禍における無形文化遺産の現状と課題について、国内外の情報を収集し、それをウェブサイト及びSNSによって発信した。また、ユネスコのウェブサイトにコロナ禍における日本の無形文化遺産の現状と課題の報告を掲載した。

## 論文

- 石村智:「無形文化遺産としてのカヌー文化」『モノ・コト・コトバの人類史:総合人類学の探求』雄山閣 pp.203-218 22.3

## 報告

- 二神葉子:「無形文化遺産の保護に関する第16回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』16 pp.1-27 22.3
- 石村智:「オセアニアにおける無形文化遺産保護条約の現状と課題」『日本オセアニア学会 Newsletter』132 pp.1-11 22.3

## 発表

- 石村智:「Geoarchaeological information and cultural heritage disaster risk management: Cases in Japan」ユネスコ・イコモス共催国際会議『Culture, Heritage and Climate Change (ICSM CHC)』オンライン開催 21.12.7
- 石村智:「無形文化遺産としてのカヌー文化:近年の動向」日本オセアニア学会第39回研究大会 オンライン開催 22.3.1